

『可憐なエーデルワイスに癒されたい』

“スイス大自然満喫 7 日間”

〔クラブツーリズム コースNo.19041〕

出発 平成 24 年 8 月 11 日（土）

添乗員（TD）：M 田 S 美さん

帰国 平成 24 年 8 月 17 日（金）

エーデルワイス～♪～エーデルワイス～♪と、スイス旅行が決まってから幾度となく口ずさんでしまっている。『サウンド・オブ・ミュージック』では、トラップ大佐がナチスドイツに併合されてしまう祖国オーストリアを想って、しみじみと歌い感動を誘った。以来、この花はオーストリアの象徴となっているらしい。しかしトラップ一家はナチスから逃れてスイスに亡命するし、何よりもエーデルワイスはスイスの国花であるので、この歌はスイスを想う歌ということで、いいでしょう！

エンディングは「**Bless my homeland forever** ♪～」となり、つまりこの歌は、“わが祖国よ永遠なれ！”という愛国精神に満ちた歌なのである。

昨今、竹島、尖閣諸島、北方領土と、我が国はキナ臭い、けれども非常に重要な問題を突き付けられているが、いずれも日本国固有の領土であり、これらはしっかりと守っていかなければ、返還してもらわなければならないと強く思う。日本人なら誰でもそう思うに違いない！“わが愛する日本よ永遠なれ～！”その前に、日本の政治家、いや日本人そのものが毅然とし、もっとしっかりとなくてはならない！…とか考えているうちに、旅行が迫ってきた。

そうそう、先日、28～29 年ぶりに会った知人から、昔、溜池にあった「ベルマンズポルカ」というドイツビアホールで、店で歌っている太った女性と僕が『エーデルワイス』をハモットたのが、とっても良くて印象深かったと言われ、それ以来、ちょっと悦に入って『エーデルワイス』を口ずさんでしまうのだ♪～(*^^)v

猛暑の毎日が続いているが、スイスを思い浮かべるだけで何となく涼しげな気分になってしまふ。スイスといえば、美しい山と森と湖の国というイメージであり、ハイジの国でもある。今回の旅程には、マッターホルンを眺めながらのハイキングも入っており、さわやかな涼風を受けながら、傍らに咲く可憐なエーデルワイスに心躍らせ、おいしい空気をいっぱい吸い込んでみたい～！ハイジのような女の子に会って“グリュエッツィ”って挨拶できたらいいなあ～(*^^)vなんて考えるだけでも嬉しくなってしまう。とにかく猛暑の日本を飛び出したい！

8月11日（土） 東京 晴れ、スイス 晴れ

7時55分に第1ターミナルに集合ということで、早めのスカイライナー3号（日暮里発6:58）で出発した。

お盆休みの始まりという感じで、さすがに空港は混雑しており、受付の後の再集合はなく、各自バラバラでの搭乗となった。今回のTD（ツアーディレクター）はM田S美さん。彼女はスイスだけでも50回以上添乗しているというベテランで、「あさいち」の有働アナウンサーを想わせる、一見大人しそうだが飲ませると踊ってくれそうな感じの、‘秘めた何か’を持っていそうな方であった。

おひとり様限定ツアーということで、シャイな僕でも気後れすることなく、受付の際に僕の後ろに並んだM谷さんと気軽に話ができ、搭乗前にすでに何人かの方たちと会話を交わすことができた。H井さんには美女と写真を撮っていたでいてしまった。



（K野さん、M谷さんと LX0161 便のエアバス 眼下に広がるスイスの大地にワクワク）

スイス航空 161 便は 10 時 30 分に出発。チューリッヒまでの 9,600 ｷロを 11 時間半かけて飛行し、現地時間の 15 時少し前の到着となった。空港を降りると、清々しいスイスの空気を吸うヒマもなく、慌ただしくバスに乗り込んだ。ワルターさんの運転で 15 時半にバスは出発した。

車中では TD さんからプリントが配布され、通貨の CHF（サンチーム）や、チップ、飲料水、日本への郵便料金などのスイスの基本情報、さらにはホテルの窓の開け方等について、そして簡単なドイツ語についての説明があった。ハイキングの時などに行き会々と“グーテンターク”でなく、“グリュエッツィ”という挨拶がよく交わされるということであった。学生時代、そして大学院の入試にもあったのでドイツ語は頑張って勉強したつもりけれど、簡単な挨拶くらいしか覚えておらず、あの時の勉強は何だったんだ！と非常に情けない感じがした。

スイスの公用語はドイツ語、フランス語、イタリア語そしてロマニッシュ語であるが、これって、高1の時に地理で覚えた記憶があり、ロマニッシュ語ってのはどういう言葉なのだろうかと、高校生の時に疑問に思ったことを思い出した（いくつかの言葉が混じった方言だと思ったけど）。観光地が多いから、スイスの人たちはほとんど英語が話せ、バイリンガルや3～4つの言葉を話すマル

チリングルも多いとのことだった。

<スイス基本情報>

- * 時差 マイナス7時間(夏時間です)
- * 通貨 スイスフラン(CHF) 1フラン=100サンチーム、1/2フラン=50サンチーム
紙幣 10、20、50、100
コイン 5、2、1フラン 1/2、20、10、5サンチーム
- * チップ 枕→ 1フラン
WC→ 20サンチーム~1フラン
テーブル→ 基本的に含まれていますが、お飲み物代の精算時に半端な金額の場合、チップとして端数を切り上げてお支払いいただくとスムーズです。
- * 水 水道水には石灰分が多く含まれます。衛生的には全く問題ございませんがミネラルウォーターのご利用をおすすめします。
レストランへの飲み物の持ち込みはご遠慮ください!
- * 郵便 はがき用切手 1、80フラン
住所、宛名は日本語でOK、AIR MAIL、JAPANのみアルファベットで。
- * 電話 テレフォンカード 5または10フラン
公衆電話から→ 0081-市外局番の最初の0をとって直接ダイヤル
- * 免税 1回のお支払い300フラン以上のお買い物をされた場合、税金の一部が払い戻される制度がございます。(店によります)ただし、陸路で国境を越える場合、早朝便でご出発の場合は係官の不在のケースがあり、手続きできないことがあります。

ホテルのご注意!

- * お湯を使う時間帯が重なるとうるくなることがあります、その際は時間をずらしてご利用下さい。
- * 浴場のついていないホテルがほとんどです。暑い場合は窓をお開け下さい。レバーの向きにより窓の開き方がかわります。
- * シャワーのみの部屋、ダブルベッドの部屋、広さや眺めなどさまざまなタイプの部屋があり、均一ではございません。混雑期には特に変更や調整が困難となりますのでご理解くださいませ。

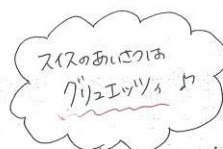
クラブツーリズム 旅の豆辞典 あいさつ~ドイツ語~

おもいきって、ドイツ語であいさつをしてみませんか。日常的なあいさつのことばを並べてみました。

- はい=ヤー (Ja) ●いいえ=ナイン (Nein) ●乾杯=プロースト! (Prosit)
- ありがとう=ダンケシェーン (Danke Shoen)
- どういたしまして・どうぞ=ビッチ (Bitte)
- おはよう=グーテンモルゲン (Guten Morgen)
- こんにちは=グーテンターグ (Guten Tag)
- こんばんは=グーテンアベント (Guten Abend)
- おやすみなさい=グーテナハト (Gute Nacht)
- さようなら=アウフヴィーダーゼーエン (Auf Wiedersehen)
- または チュース! (Tchuess!)

クラブツーリズム 旅の豆辞典 かんたん!旅のドイツ語**

- 大きい=グロス (Gross) ●小さい=クライン (Klein)
- たくさん=ヴィール (Viel) ●少し=アインビシエン (Ein Bischen)
- 飲み物: 水(は)なし=バアツァー オーネ ガス (Wasser ohne gas)
- ビール=ビア (Bier) コーヒー=カフェ (Kaffee) 紅茶=テ (Tea)
- 白ワイン=ヴァイス (Weiss Wein) 赤ワイン=ロト (Rot Wein)
- トイレ=トイレット (Toilette)
- 女性=ダーメン (Damen) またはフラウ (Frau) ●男性=ヘーレン (Herren)
- いくらですか? =グーフィール イスト イ? (Wieviel kostet es?)
- これをください=ダス ネーメ イッヒ (Das nehme ich)
- 数字 1:アイン (eins) 2:ツヴァイ (zwei) 3:ドライ (drei)
- 4:フィーア (vier) 5:フュンフ (fünf) 10:ツェーン (zehn)



☆ グルピオン スルクリン
がぶがぶジュース (赤・白)

☆ リベラ
乳清から作られた炭酸ドリンク

★ ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマニッシュ語が
公用語です

(このようなプリントがあるととっても重宝します! さすが M 田さん(∧O∧)/)

チューリッヒからバスは南に向かってツーク方面に進み、30分程するとツーク湖を見ることができた。抜けるように青く広々とした空がどこまでも続き、美しい山と森と湖の国スイスを実感できるような光景が続いた。ヨネックスのコーポレートカラーを思わせる、青い空と緑の木々、湖のターコイズブルーと白い雲のコントラストは素晴らしく、少し眠かったけれどもワクワクして車窓からの景色を楽しんだ。



(ツーク付近 何となくスイスっぽい ツーク湖)

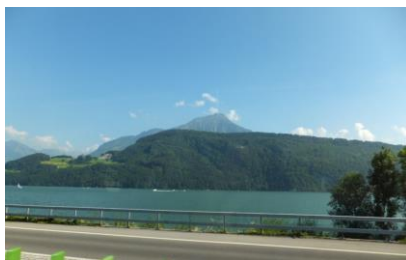
左手にリギ山、そしてルツェルンの町を過ぎると右手にピラトゥス山が見えたが、リギ山は古くからアルプスの御来光を仰ぐ展望台として人気があった所で、1871年にヨーロッパ最初の登山鉄道が設けられたという。ピラトゥス山はキリストを処刑したローマ総督ポンティウス・ピラトの亡霊がたどり着いたと

いう伝説から名付けられ、実際に中世までは「魔の山」として恐れられ、登山が禁止されていたという。登山が禁止なんていうと、ちょっと危ない感じがしてしまう。この山では何かご禁制のものが栽培されていたのでは…と穿った考えをしてしまうのは、オジさんになった証拠だろうか(^^)

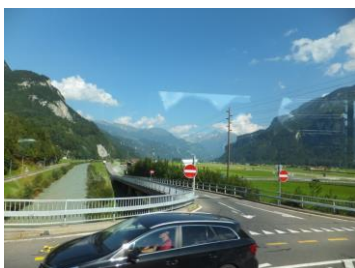
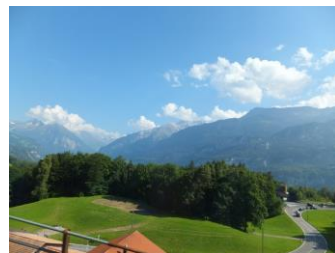
また、この辺りはウィリアム・テル伝説ゆかりの地になっているそうだ。ルツェルンでは毎年夏（8月中旬～9月中旬）に音楽祭が開催され、今年も行なわれているという。



(アルプナハ湖)



ルツェルン～プリエンツ)



(登山鉄道の駅～氷河が溶けて濁ったアーレ川を渡る～プリエンツ湖)

登山鉄道のブリューニック - ハッセルベルク駅を過ぎると牧羊地が広がり氷河が溶けて濁ったアーレ川を渡って進んだ。

ここで一句、『氷河融け 濁れし流る アーレ川』

プリエンツ湖畔のプリエンツ村は木彫りが有名で、木工芸品店も多く、インターラーケンやグリンデルワルトで売られている木彫りの産地になっているとの説明があった。プリエンツ湖を過ぎるとインターラーケンはすぐであった。インターラーケンとは、湖（ラーケン）の間（インター）という意味で、プリエンツ湖とトゥーン湖の間にある町という意味とのこと。



(ホテルメルクールとインターラーケンの町並み 空にはたくさんのパラグライダーが！)

17 時 30 分にインターラーケンのホテルメルクールに到着。スイスのホテルには当然ながらクーラーはなく、部屋の中に虫が入って来ないように、少しだけ窓を開け放して、すぐに町の散策に出かけた。町なかには馬車が走っていて観光地の趣を醸し出しており、見上げると、無数ともいえるパラグライダーが、この町の上をゆるやかに飛び交っていて、その眺めは優美であった。それを見ているだけで落ち着き、安らぎを感じられる動きであった。僕もパラグライダーで、スイスの美しい町と湖、壮麗な山々を見下ろしたいな～(^^)

オプションの夕食を申し込んでいなかったもので、何か食べに行こうと思っていたところ、ツアーの若い女性（S さん）から誘われ、嬉しくて二つ返事で了承した。これがおひとり様限定ツアーのいいところ！

で、彼女の意向で、夕食はなんとマクドナルドになってしまいました～(>_<) インターラーケンのマックのお味は？…特に変わりなし～



（マックと公園の緑越しのユングフラウ　町なかでのホルン演奏なんてスイスっぽい！）

食後に町なかを散策したが、マックよりも美味しそうなレストランがたくさんあって、凄く損をした気分になってしまった…特に、M 田さん、M 谷さんが食事をしていたレストランの前では、何やらホルンの演奏をやっていて、いかにもスイスっぽい感じが素敵で、マックよりもこっちの方がよかったなあ～。

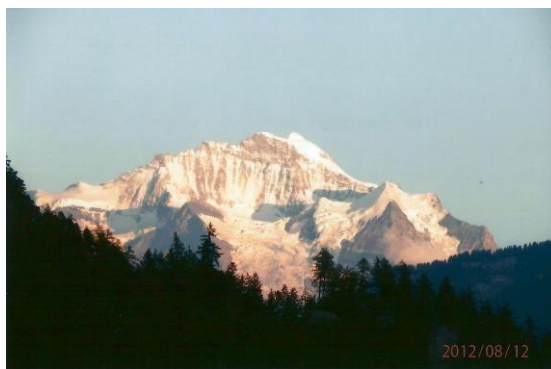
小さな町には、たくさんのテラスレストランがあり、短いスイスの夏を精いっぱい楽しんでいる人たちで賑わっていた。緑がきれいなヘーエマッテ公園から見えるユングフラウは壮麗で気持ちが高く、その後の夕焼けは、スイス初日のわれわれを歓迎してくれているように感じられた。



（たくさんのテラスレストランと絵はがきのようなインターラーケンの夕焼け）

8月12日（日） 晴れ

早起きして、朝食前にインターラーケンの町を散策したが、森閑とした落ち着いた雰囲気が素敵であった。



(彼方にユングフラウを望む 平井さんが撮影されたホテルからのユングフラウ)



(壮大なビクトリアホテル 出発前に1枚 氷河で濁ったリュチーネ川)

8時にバスは出発し、ドライバーはフェルナンドさんになった。左手にリュチーネ川を見ながら進み、30分ほどでグリンデルワルト駅に到着した。



(グリンデルワルト駅と辺りの風景、登山電車)

グリンデルワルトの町からはベッターホルンが見え、ベッター（天気）というように、この山に雲がかかると天気が悪いということだそうだが、何とか大丈夫そうなのでホッとした。16年の歳月をかけて1912年に開通したというユングフラウ鉄道に乗り込み、一路ユングフラウヨッホを目指した。

途中、9時半ころに、クライネ・シャイデックで乗り継ぎのため下車して写真撮影となったが、アルプスの山々の黒と雪の白、そして手前の緑のコントラストが素晴らしく、あたかも絵画の世界に入り込んだ気分になった。クライネ・

シャイデックを過ぎると周囲には雪と氷河が迫って来て、後はトンネル内に入っていた。



(まるで絵画の世界に入り込んだようなクライネ・シャイデック駅)



(クライネ・シャイデック～アイガーグレッシャー駅)



(アイガーグレッチャー駅 アイガーワンド駅の標識と駅の窓から見えた氷河)

10 時に出発して、アイガーグレッチャー駅を過ぎてトンネルに入り、アイガーワンド駅 (2865m) とアイスメア駅 (3160m) では、列車を降りて写真撮影した。11 時少し前にユングフラウヨッホの駅に到着。スイス国旗の左側にベルン州、右側にはバクス州の星の州旗が掲げられていた。



(アイスメア駅 ユングフラウ駅 写真撮影していたら、日本人の爺さんに “立ち止まるな！” と叱られてしまったぁ(^^ゞ 国旗の両隣には州の紋章が掲げられていた)

ユングフラウ駅の構内には世界一高い場所に設置されている日本の赤いポストがあり、これはユングフラウと富士山五合目郵便局の姉妹提携を記念して設けられたそうだ。昨日、TDさんから言われていた通り、事前に購入して書いておいた友人への（自分宛にも）絵はがきを投函した。

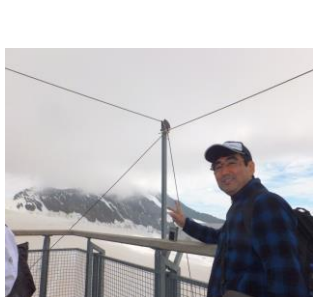


（名 TD の M 田さんからは軽快な説明が！ 青く照らしだされ幻想的な氷の宮殿）

ちょうどお昼時ということで構内は混雑しており、特に、カップのキムチラーメンを食べている奴らがいて、ちょっとムカついてしまった（こんな所で匂いのキツイの食べないでヨ！）。人ごみを縫うようにして氷の宮殿を通して、全面ガラス張りのスフィンクス・テラスに出ると、外は一面の氷の世界であった。全長 22 kmあるヨーロッパ最長のアレッチ氷河は、氷の厚さが 900m もあり、1年に 180m のスピードで流れているという。スフィンクス・テラスは標高 3573 mでヨーロッパ最高地点にある展望台ということだが、スフィンクスって言う名前の由来は何なんだろう？



（将にトップ・オブ・ヨーロッパ！ アレッチ氷河はヨーロッパ最長で 22 kmもある！）



（美女たちとともに展望台へ出た）

展望台に出ると、さすがに寒かったが、美味しい空気を思いっきり吸い込むことができ心地よかった。立派な天文台もあり、北側にはクライネ・シャイ

デッキなどの緑を見ることができ、ちょっとホッとさせられた。



(北側には緑が見られた プラトー展望台は超寒く、雪道は滑って怖かった～)

時間を気にしながら早足で構内を抜けて、少し離れたプラトーと呼ばれる展望台まで足を運んだ。ここは一步外に出ると寒いなのって！！少し滑りながら雪道を頼りない足取りで進み、何とかスイス国旗までたどり着くことができた。

ユングフラウヨッホには約1時間の滞在となり、12時ジャストの列車でクライネ・シャイデックに戻り昼食となった。早速、スイスの白ワインを飲んでみたが、ドイツワインのような芳醇な甘さを期待していたのだが、それほどでもなかった。スイスは白ワインの隠れた名産地と言われ、如何せん山ばかりで耕地面積が狭くて輸出するほどの量は作られていないということだが、もう少しドイツのようなまろやかさが欲しいところである。



(クライネ・シャイデックにて集合写真1)

口直しにミネラルウォーターを購入したのだが、な、なんとCHF5.30もした！日本円に直すと500円近いよ(T_T)いくら観光地といっても、いくらスイスが物価高といっても(因みに消費税は14%)、法外な値段には閉口させられてしまったあ～<へ'>

14時40分にグリンデルワルトに戻り、少しの時間だが、町なかを散策することができた。小さな町にしてはアルペン用品の店が目立っているように感じ

られた。15 時 10 分にバスは出発し、トゥーン湖に沿ってのドライブとなった。



(グリンデルワルトの町は小さくて… トゥーン湖 カートレインの乗車駅)

1 時間ほど進みカンドルシュテークという所でトイレ休憩となったが、その間、TD さんからはエッシネン湖やカートレインについていろいろと説明があつて、眠らせてもらえなかった。16 時半にカートレインに乗車。車ごと電車に乗って移動するという非常に珍しい“乗り物”である。でも、乗車するにはとても狭い所を通らねばならず、バスはサイドミラーを折りたたんで、なんとかギリギリで乗車することができた。＼(＾o＾)／



(大型バスにはギリギリのスペースしかない！ ホットするフェルナンド ご褒美の写真)

“フェルナンド～、You did it！”と誉めたら、TD さんとツーショットの写真を撮ってくれと言われたので、一枚撮ってあげた(*^^)v

カートレインにはバスごと乗車し、移動中もわれわれはバスの席に座ったままであった。すぐにトンネルに入り、17 時 10 分にバスが下車して再び出発となった。ヴァリス州はワインの産地ということで、ローヌ氷河が削った広い谷にはたくさんのブドウ畑があった。また、スイスでは、このような広い谷には軍事用としても使用される滑走路が造られているということだが、この谷にもしっかり設けられていた。

永世中立を堅持するためにはしっかりとした軍事力が整備されていなければならないのだろうし、スイスのように陸続きで他の国と接している場合は、なおさらなのだろう。昨今の世界情勢を鑑みるに、我が国はいつまでもアメリカの傘下で安閑としていられないような状況になってきているようだ。頭のおかしな国がいつ攻めてくるか分らないし、それに対応できる防衛力というのは保有していなければならないのだろう。東アジアをはじめ途上国が台頭してきているなか、難しい課題が突きつけられている。



(ローヌ川の広い谷には滑走路が！ 拡大写真➡ 急斜面にはブドウ畑が設けられている)

ローヌ氷河の溶けた水が流れるローヌ川は一度レマン湖に注ぎ、そこから再びローヌ川の名称でフランスを流れ、リヨンを経由して地中海に注いでいる。フランスにはパリを流れるセーヌ河と南仏を流れるローヌ川があることは知っていたが、ローヌ川の源流がアルプスのローヌ氷河なんて、とってもヨーロッパらしくて何となくメルヘンチックな印象を受けた。

氷河の溶けた水が流れる川や猛々しい山々を縫って走る道路といったら、数年前に訪れたアラスカを思い出してしまう。しかし、どちらかと言うとアラスカの方が荒削りというか、ぶっきらぼうなイメージかな。また、カナダやノルウェーにも似た雰囲気を感じるけど、それぞれの国によって微妙な違いがあって、それは言葉で明確に比較することは難しいなあ。

17 時 30 分、長いトンネルを抜けるとフィスプという町を通過した。左手にキスカ川が流れ、標高 1200m の山の急斜面には狭小な土地を利用してブドウ畑が作られていた。

程なくしてゆっくり走る氷河特急を追い抜き、シュタルデンという町を通り、17 時 45 分にサントニコラスという町に入った。サントニコラスとはサンタクロースのことで、元々トルコの方で活躍していた司教さんに由来して町の名前になったということだ。そういえば、以前トルコで“サンタクロースって、トルコの人だったんですよね？” って質問していた人がいたが（石塚君ですね、結婚おめでとう！）、サンタクロースとトルコって浅からぬ関係があったんだね（笑）



(氷河特急の彼方にブライトホルンが！ 急斜面の家々にはどうやって行くの？ サンタ)

さらにバスの右手にはバイスの大崩れという山崩れの後が見られたが、これは 20 年ほど前に突然おこった山崩れの後で、そのために線路や道路が崩壊し、

以降、線路と道路が山崩れの所を迂回するようになったという。20 年も経った山崩れの後には草木も茂り始めていて、時の流れを感じさせてくれている。



(バイスの大崩れ ツェルマットの駅からメイン通りは観光客で賑わっていた)

左手にはミシャベル連峰のドムという山がちょっと顔を出したが、4545m あり、これは国境になっていない山ではスイスで一番高いということであった。

18 時にテーシュという駅に到着し、そこでバスとはお別れ。ツェルマットはガソリン車の乗り入れ禁止ということで、駅の周辺にはたくさんの駐車場が‘営業’されていた。重いスーツケースを引っ張りながら、18 時 20 分発の列車に乗り込むと、15 分でツェルマットに到着となった

マッターホルンの玄関口ということで、標高 1631m のツェルマットは思った以上の観光客で賑わっていた。さすがにアルピニストの聖地である。わがもの顔に電気自動車が走っていたが、早くから登山電車を整備し、環境保護のために尽力しているスイスの姿勢は、さすがに観光立国！と感嘆させられた。



(電気自動車のみが走行 OK スイスらしい長〜いホルンでお出迎え！ マッタ〜！！)

15 分ほど歩いて、ホテルクローヌに到着。すぐ脇には氷河で濁ったマッターフィスパ川が流れ、建物のすぐ前の橋はマッターホルンの観賞スポットになっていて観光客が絶えずたむろしているロケーションである。このような絶好スポットに隣接したホテルクローヌにはマッターホルンビューとその他の部屋があつて、くじ引きで部屋割りが決められたが、くじ運の悪い僕は、“後ろのホテルビュー” となってしまったあ〜(T_T)

19 時 25 分にホテルを出発し、少しずつ夜の帳が訪れつつある落ち着いた雰囲気を楽しみなが、夕食のレストランまで 15 分ほど歩いた。途中、古い町並みが残っているオールドツェルマットを見ながら進んだ。この町は 19 世紀の初め

まではマッター谷の奥にひっそりとたたずむ寒村にすぎなかったのだが、アルピニズムの広がりによってマッターホルン登山・観光の基地として発展するようになったという。食後は少しひんやりとした気持ちよい空気に包まれながら、ゆっくり 20 分ほどの散策を楽しんだ。



(ホテルの全景と橋-翌日に撮影 オールドツェルマット 幻想的な夜のマッターホルン)

8 月 13 日 (月) 晴れ

6 時のモーニングコールの前に起きて、朝食前の散策に出かけた。何しろ部屋からは後ろのホテルしか見えないので、足を使って補わないといけないのだ！負け組はそれなりの努力が必要ってことだあ～(^^)

朝方は少し雲が掛かっていたが、7 時近くになると快晴になっていった。朝早くからスキーを担いで山道を登っていく外人がいたが、その光景はこの町にふさわしく思えた。



(静かな朝のツェルマット マッターホルンは時々刻々と変化して素晴らしい！)

8 時に出発して登山電車の駅まで歩いたが、現地ガイドが来なくて TD さんがちょっとイライラしていた。携帯で呼び出したりしていたようだが、5 分ほど遅れてガイドの M 月さんが現れた。彼女はグリンデルワルト在住で、以前はカナダでガイドの仕事をしていたというが、スイスのガイド歴は 7 年。元々はスキーガイドをやっていたそうで、華奢な体つきの割に雪焼けした肌はスキーが上手そうな雰囲気であった。現地ガイドっていうし、遅刻してくるから、てっきり外人（スイス人）かと思ったので、ちょっと意外だった。

急勾配を登る登山電車は 1898 年に開業し、当初から電氣を用いたということだが、これはアルプスの雪融け水による水力発電が利用できたからで、登っていくにつれてマッターホルンがぐんぐんと迫ってくる光景は圧巻であった。

9時半少し前に終点のゴルナーグラートに到着した。抜けるような青空が美しく、空気がおおいかった。もの凄い眺望！ 壮大！ splendid！



(ゴルナーグラート駅と展望台 リスカムとカストロ・ポロックス〜ブライトホルン)

この辺りには 4000m 超の山が 29 峰もあり、最高峰がアルプスでも（モンブランに次いで）2 番目に高いモンテローサ（4634m）、2 番がドム（4545m）、3 番目がリスカム（4527m）、以下、④ヴァイスホルン（4505m）⑤ターシュホルン（4491m）⑥マッターホルン（4478m）⑦ダン・ブランシェ（4357m）という順になっている。360 度の景色を、それぞれの山を確認しながら楽しみ、山々の非対称性の美学を味わい、ゆっくりと深呼吸をした。

左端のモンテローサからグレンツ氷河を越えてリスカム、その隣は双子座に因んで命名されたカストロとポロックス（カストールとポリュックス）、その右川がブライトホルン、さらにその先にはマッターホルンと続く。その反対側にはミシャベル連峰のドム（4545m）を見ることができた。



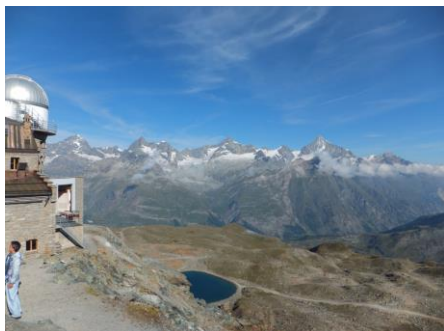
(晴らしい眺望

ゴルナーグラートホテルのテラスとマッターホルン)

これらの山々の中でも、マッターホルンは凛とした美しさ、将にアルプスの女王と呼ばれるに相応しいたたずまいを見せてくれた。今まで 30 数カ国を巡って、いろいろ素晴らしい景色を眺めてきているけれど、マッターホルンとその周囲のアルプスの山々の壮麗な景色は、「壮大な眺望」「気持ちよい眺め」「心が洗われる情景」「安らぎを感じる風景」…等々、種々のクライテリアがあるけれども、いずれのクラスをとっても上位にランクされ、僕の中での総合得点はかなり高いと断言できる(*^^)v

素晴らしい眺望なので言葉が発せない。下手な言葉では表すことのできない‘壮大で’‘素敵で’‘心が洗われ’‘安らぎを感じる’‘気持ちのよい’…眺め

なので、写真を貼り付けるくらいしかできません～(^^)



(天文台から右側を望んでいくと、全体がスイスにある山では最高峰のドムが見える)

3130m のゴルナーグラート展望台から、フェイスブックに“マッターホルンなう”と書き込みしたが、こんな高い標高からののに、よく繋がるのには驚かされた。一昨日のユングフラウヨッホからもしっかり繋がったけれども、さすがに観光立国スイス、swiss.com も凄い！とちょっと感激してしまった。もちろん、皆さんからたくさんの“いいね”をいただきました(*^^)v

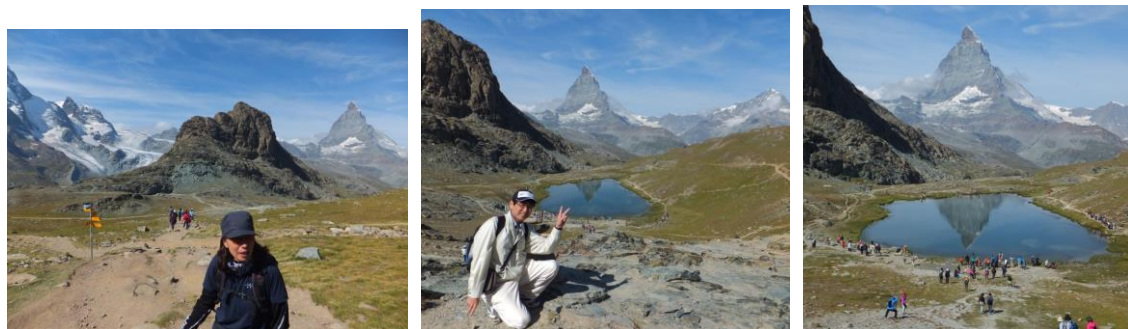


(マッターホルンなう～360° のパノラマが凄い！お利口な nana ちゃんとツーショット)



(救助犬の名前は Nana っていうんだって マッターホルンをバックに集合写真2)

10時19分の電車に乗って下っていったが、車内で神戸から単身で来ているという中年の女性から、昨日3100クルムホテルに泊まったが、眺めが最高、かつ2005年に改装されているのでとても快適で、しかも値段もそれほど高くなくて2食付きでCHF200（18,000円弱）と、ちょっと興奮気味な口調で話しかけられた。ネットで申し込んだら、この時期（お盆休み）にも簡単に予約できたということなので、今度来る時はぜひ泊まってみたい。いろいろと旅の話を伺いたかったけれども、われわれはすぐに下車タイムとなってしまう、それ以上の情報はゲットできなかった。



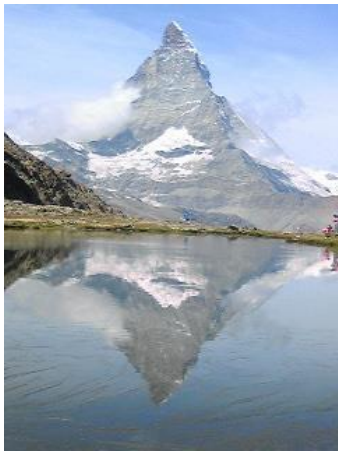
（M月さんの説明を聞きながら、のんびりハイキング 後ろの岩山はリッフェルホルン）

ローテンボーデンで降りて、10時半からM月さんのガイドで、‘のんびり・ゆったりハイキング’がスタートした。四方を山に囲まれ彼方に霊峰というか麗峰マッターホルンを仰ぎながらのウォーキングは素晴らしかった。遅咲きのリンドウやバフンアザミ、マーモットの巣穴などの説明を聞きながら、マッターホルン登山に必須のトライアル登山の山となっているリッフェルホルン（2927m）という岩山に向かって進んだ。リッフェルホルンのトライアルでパスすると、次はブライトホルンでのトライアルがあり、それにパスして初めてマッターホルンへの登山が許されるのだという。



（高山植物とマーモットの巣穴）

リッフェルゼーでは、見事な“逆さまッターホルン”を見ることができた。これは天気が良くて風の穏やかな時でないと見られないというから、とてもラッキーと言える。たくさんの魚が泳いでいたが、この湖の底の方は冬でも凍らないのだろう。



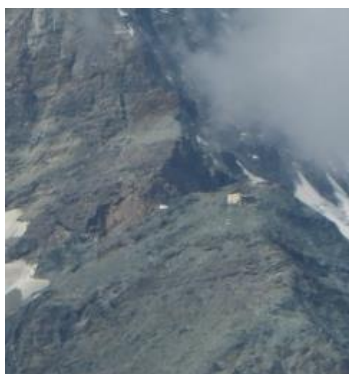
(リッフェルゼーの逆さマッターホルン 集合写真3 いつも真ん中に陣取っている！)



(さわやかハイキングで身も心もリフレッシュ！ たくさんの魚も泳いでいた)

好天の下、信じられないようなバックグラウンドの中を歩きながら、自分自身に“生まれてきてよかったあ！”とささやきながら、快適なハイキングを楽しむことができた。道標もないハイキングロードなのだが、何とんでもマッターホルンの峰が、進むべき方向を示唆してくれていた。

ここでまた一句、『標なき 道のチャートは マッター峰』



(遙かヘルンリ小屋を望むことができた う〜ん、気持ちのいいハイキング(^^)v)

M 月さんから、マッターホルンの北東稜にヘルンリ小屋が見えると教わり、何とか確認することができた。あんな所を登って行くなんて！この小屋から上

はほとんど垂直に近い絶壁で、「魔の山」として恐れられ、19世紀初頭まで誰ひとり登ろうとはしなかったということが十分に理解できた。



(リッフェルベルク駅へ向かって歩く　ヘリはクルムホテルに物資を運んでいるの?)



(マッターホルンを望みながらおにぎりとリンゴのランチ　駅前で戯れ(笑))

リッフェルベルク駅前で、おにぎり弁当となった。このような雄大な景色の中で食べるランチは最高、超デリシャス！デザートも入っていたので、山をバックにその紅色の写真を撮ってみたが、う〜ん、コントラストが中々グッド！　久々にリンゴを丸ごとワイルドにかぶりついたが、もちろん血は出ませんでしたよ（笑）

ホームの前には赤い牛の人形があったので、しっかりと跨ってきたし、顔出し看板のショットにはM谷さんを付き合わせてしまった。相変わらずバカをやってしまうね〜、Mちゃん、申し訳ない<(_ _)>

12時半に集合して登山電車で行った。登っていく時と比べ、次第に遠ざかるマッターホルンと、眼下に広がっていくツェルマットの町を心に余裕を持って眺めることができた。



(眼下にはツェルマットの町が見えてきた　登山電車のすれ違い風景)

ツェルマットに戻ると、午後は自由行動であるが、僕はオプションの「スネ

「ガ半日観光」に参加したので、13 時 30 分に地下ケーブルカーで出発した。



(ケーブルカーを降りると、今度はゴンドラで下っていく)

雪の影響がないように地下ケーブルカーになっているらしいが、2288m のスネガまで登っていくのに地下を通るといことが、ちょっと奇異な感じがした。しかし登って駅を出ると、青空が広がっていて思わずホッとしてしまった。スネガ駅からはゴンドラで下っていくと、小さな湖（池）があり、湖畔にはヤナギランの紫が美しく咲いていた。



(ヤナギランの紫にホッとさせられた ちょっと雲がかかってきたけど、のどかな湖畔)

湖の周りにはピクニックで訪れたと思われる家族連れや、水遊びをする子供、犬を連れて散歩に来たと思われる人、中にはビキニ姿で日光浴をしている女性もいて、アルプスの山々の中にいることを忘れてしまうような、のどかな光景であった。実際、湖の水はそれほど冷たくなく、僕も水着を持ってきて水遊びをしたかったなあと感じた。

天気は素晴らしかったが、午後になってマターホルンにはちょっと雲がかかってきてしまい、残念なことにスネガから見えるという左右に延びる稜線が、ちょっとハッキリしなかった。また、少し風が出てきて、この湖では逆さモッターホルンを見ることはできなかった。



(雪崩止めとビキニで日光浴をしている女性 out of place ですね (笑))

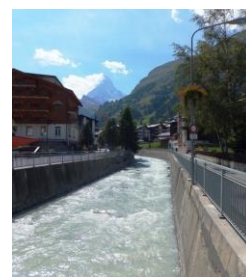
左上の写真の奥の山の下にはツェルマットの町があるため、中央上の写真に見られるように、山には雪崩止めが設けられているのを見ることができた。ビキニで日光浴なんて、スイスアルプスには場違いな光景も見られて可笑しかったが、しっかり写真に収めてしまったあ～(^^)

この湖で、さらにハイキングを続ける一行と別れて、我々はスネガの駅前にある「パラダイス」というレストランでティータイムとなった。少し暑いくらいで、テラスの奥に直射日光を避けるようにして座って寛いだ。ここにはエーデルワイスが可憐な白い花を咲かせていたが、ハイキングの時には見られず、ちょっとガッカリしていたので、待ち望んでいた花にも巡り合えて嬉しかった。実際、エーデルワイスはツェルマットの町にある墓地に植えられているということであった（後でツェルマットに戻って確認した）。



(アルプスとは思えない爽やかな気候　可憐なエーデルワイス(*^^)v　マーマットの泉)

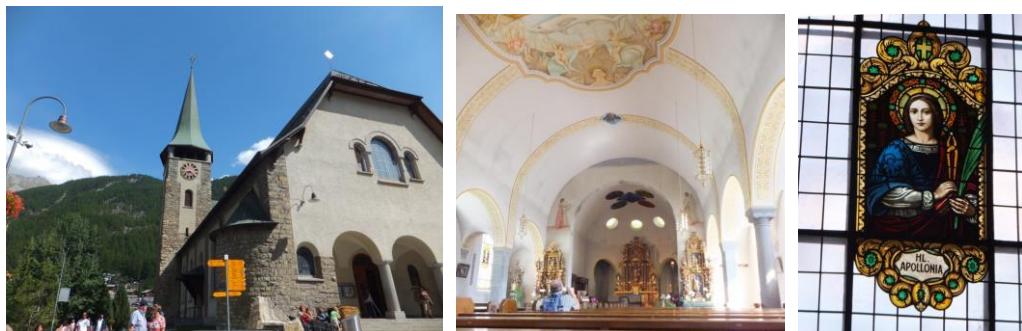
スネガを後にして、ツェルマットの町に戻り、一人で散策・買い物を楽しんだ。例の、マッターホルンの形をしたチョコレートをはじめ、いくつかのチョコやお菓子を購入した。



(可愛らしいお店と　マッターホルン型チョコレート　　　　　　　マッターフィス川)

マーマットの泉の後ろには、マッターホルン博物館があり、ツェルマットの歴史とアルプス登頂の記録が集められているという。入ってみようかと迷ったが、ドイツ語等の説明では解らないかな、と考えてやめにした。1865年7月、8度目の挑戦で初登頂に成功したイギリスのウィンパーら7名は、下山の際にザイルが切れて4名もの犠牲者を出したという。この事故は裁判にかけられ、結局無罪になったのだが、彼らの初登頂の栄誉は消えてしまったそうだ。その切

れた旧式の細いザイルが、この博物館に展示されているということである。



(教会内部に入ると、とても静かであり、聖アポロニアも微笑んでいた)

そのすぐ隣にあるカトリック教会の中に入ると空気がヒンヤリしていて、静かでホッとさせられる空間が作られていた。ノアの方舟の天井画が描かれ、歯の女神である聖アポロニアのモザイク画も掲げられていた。宗教改革の本場のスイスなのにプロテスタントではなくてカトリックなんだあ…。



(教会の近くには墓地があり、エーデルワイスもあった 夕食はスイス風しゃぶしゃぶ)

一度ホテルの部屋に戻りシャワーを浴びてから、18時50分にヴァイスホルンという教会近くのレストランで“スイス風しゃぶしゃぶ”での夕食となった。肉の質がよければ、もっと美味しかったのでは…。でもまあまあでした。ちょうど TD さんの前の席に座ったが、彼女はスイスのベテランかつシュペシャリストで、今回、このような優秀な方に巡り合えてラッキーであり、いろいろと教えてもらって本当に心強かった。

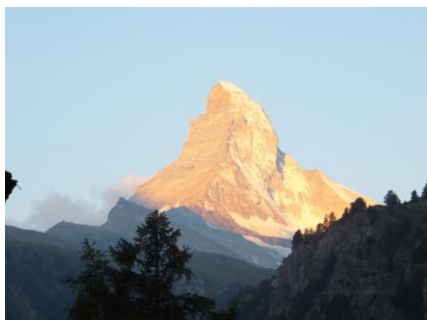
21 時前にホテルに戻ったが、後ろのホテルしか見えないビューなので BBC を見ていたら、全米プロでマキロイが優勝！というニュースをやっていた。

8月14日(火) 晴れ

朝焼けのマッターホルンが美しいというので、早めに起きて眺めに行った。確かにオレンジ色に輝く姿は pretty good !

太陽が昇るにつれて時々刻々と輝きが変化していくところが、非常に素晴らしく思えた。マッターホルンが人気なのは、登る山としてだけでなく眺める山としても十二分に美しいからであろうと実感できる光景であった。また、6時半ころから、その撮影のためにたくさんの人が撮影スポットである、クローネホ

テルの前の橋に集まって来ていた。



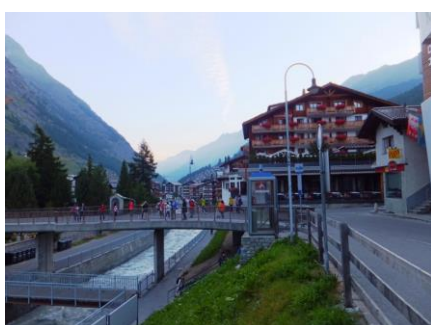
(朝焼けに輝くマッターホルン



右は同じ場所からの望遠撮影



ホテル前で)



(早くから写真を撮りに集まってきていた 京都・妙高との記念レリーフ テーシュ駅前)

8時にホテルを出発したが、TDさんが忘れ物をしたということで、ちょっと遅れて8時40分の列車でツェルマットを後にした。この町は京都と友好都市、妙高高原と姉妹都市になっていて、教会近くにその記念レリーフが飾られていた。

9時過ぎにテーシュ駅前にバスが迎えに来たが、ドライバーはフランスから来たというジャッキーさんになっていた。バスの最前列には彼の友達という二人の男が座り、10キロほど行った所で降ろしてあげていた(笑)。



(氷河特急を追い抜いて行く

シュタルデンの町と古い橋)

来た時の道を引き返しながら、TDさんからはスイスの酪農、チーズ、チョコレートの話、日本のV字谷と違って、氷河が削った谷は広いU字型になる等の説明があった。ミルクチョコレートを開発・改良したのがスイス人であるという話は興味があったが、ネスレの社はスイスにあるんだって、へえ～。

古くて趣のある橋を見ながらシュタルデンの町を抜けると、再び山の急斜面

に広がるブドウ畑を目にすることとなった。ドイツのライン下りでも、川の斜面にたくさんのブドウ畑を見たが、こちらの方がより急斜面で、スイスの耕作地の事情が推察される光景であった。

正面にベルナーオーバーランドの山々を見ながら、ブドウ畑を抜け、バスは再びローヌ谷に入ったが、光がとっても眩しく感じられた。道路の脇には、一部がナポレオンの時代に植えられたというポプラ並木が見られた。



(再び川沿いに急斜面のブドウが ナポレオン時代に植えられたポプラ並木)



(ローヌ谷は明るくて、小麦やリンゴの畑が広がっていた)

バスは西に向かって進み、10時15分にヴァリス州の州都であるシオンに入ると600mほどの小高い丘の上にトゥルビヨン城とヴァレール教会が見えてきた。二つは、この町のシンボルとなっており、小さくてもシオン町が何か散策したくなるような雰囲気醸し出していた。この辺りになるとフランスも近くてフランス語圏に入るといふ。



(トゥルビヨン城とヴァレール教会 トイレ休憩のドライブイン セント・バーナード)

シオンを抜けてマルティニを少し過ぎたあたりで15分のトイレ休憩となった。このドライブインはセント・バーナードという名前で、この辺りの救助犬に因んで命名されたという。マルティニはアルプス越えのサン・ベルナール峠が近いので、古くから交通の要衝として知られ、カエサルやナポレオンもこの町を

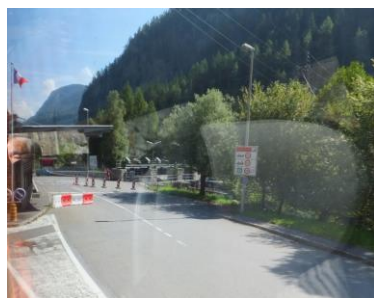
通って遠征したと言われている。



(この辺りの地図 美味しそうなフレッシュジュース！ 振り返ると霞んだローヌ谷が)

ドライブインには、売店、カフェの他、果物やジュースが売られていて、僕はキウイとリンゴのミックス生ジュースを飲んだ。とてもフレッシュであった。

バスは山道に入り、少し霞んでしまったが、振り返ると今まで走ってきたローヌの谷が遠くまで見渡せた。11時15分にホルクラ峠の頂上を通過し、10分ほど走ると国境を越えてすんなりとフランスに入った（国境の事務所は無人だった）。



(国境を越えてフランスへ

国境を越えて少し進むと雪山が見えてきた)



(シャモニーの駅と電車

町もきれいでモンブランが美しく望める)

いよいよ登山家の聖地と呼ばれているモンブランの麓の町シャモニーに入った。フランス語で白い山を意味するモンブランは、かつて「魔の山」として人々に恐れられていた。この山の登頂に初めて成功したのは1786年、若い医師のパカールと、猟師のジャック・パルマであった。以来、ヨーロッパ近代登山の幕開けとなり、シャモニーは登山とスキーリゾート、観光の町として知られるよ

うになり、第1回の冬季オリンピックも当地で開催された。



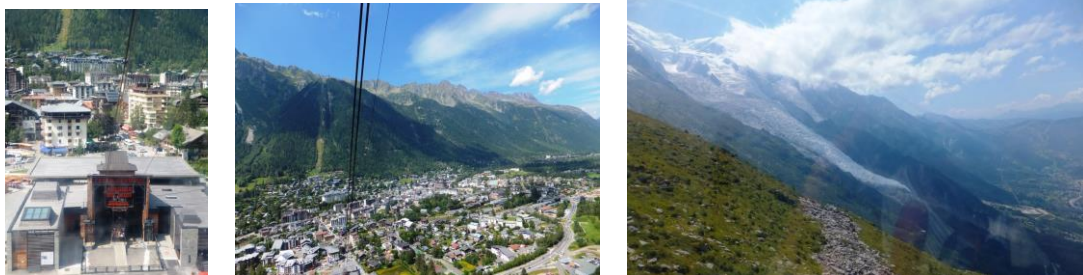
(ソシュールとパルマの銅像 パカールの銅像は何故か独り モンブランに唾然！)

氷河の研究をしていたスイス貴族のソシュールがモンブラン登山に懸賞をかけ、かつスポンサーとして援助をしたことでパカールとパルマが登頂に成功したのだが、何故かパカールの銅像は少し離れた所に1人だけで座ってモンブランを見つめている。これには種々の裏話があり一人間社会の恨みつらみって、いつの時代も同じなんだなあーソシュールとパルマの銅像は初登頂の翌年に作られ、パカールの銅像は登頂200年祭の1986年に建造されたそう。ソシュールは氷河が動いていることを発見し、モンブランには2番目に登頂したという。



(山岳リゾートのシャモニーの町は観光客が多くて賑わっていた ロープウェイの駅)

魚料理のランチの後、いよいよモンブラン登頂となった。ロープウェイを乗り継いで、一気に3842mまで登ってしまうのだ！富士山の山頂よりも高い！40分ほどの待ちでロープウェイに乗車した。まずはこの料金だが往復70ユーロ、日本円にすると7,000円近いのだが、3842mでは仕方ないでしょう(笑)。



(シャモニーの町がだんだん小さくなっていく

氷河も見えてきた)

まずは 2300m まで登り、そこからロープウェイを乗り継いで行く。2 番目のロープウェイには支柱がなくて、ロープがもの凄くたわんでいた。ロープウェイからの展望は壮大で、氷河は 1 日 50cm、1 年間で 180m も下降していくということであった。途中、こんな雪山を人が歩いている風景に遭遇しビックリしてしまった。

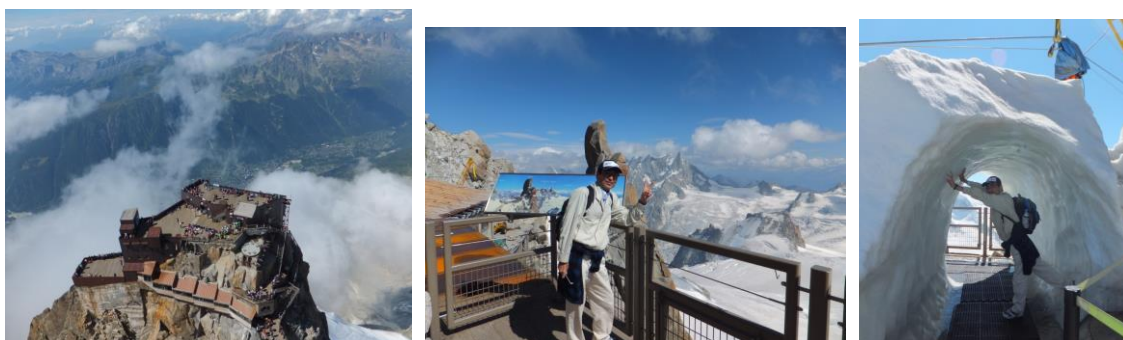


(2300m の地点でロープウェイの乗り継ぎ ロープがたわんでいる！ 人が歩いてるよ)

ロープウェイの乗車時間は 20 分位であったが、高度が高いので耳がつまってちょっと不安になってしまった。実際に、あまりの高度に気分が悪くなっている方もいて、苦しそうにしていた。山頂駅で降りると、今度はエレベーターに乗り換えてやっとの思いでエギーユ・デュ・ミディ展望台に到着した。



(エギーユ・デュ・ミディ展望台は 3842 恒例の TD さんとのツーショット！)



(まるで天空の城といった感じ すぐ下の雪上にはたくさんのテントが張られていた)

17時に下山し、17時20分にバスに乗り込んでアルプ川の谷に沿って進んだ。18時10分に国境を越え、再びスイスに戻ってきた。ジュネーブはあっという間で、街なかに入ると、TD さんからジュネーブ出身の著名人として、かのジャン・ジャック・ルソーとジュネーブ条約を提唱し、赤十字社を創立したアンリ・デュナンの紹介があった。



(下山すると、山頂とは打って変わって穏やかな風景 ジュネーブのレストラン)

18 時 30 分に地元レストランでチキンの夕食。ワインもヴァリス州のものからジュネーブのワインに変わっていた。皆さんちょっと疲れ気味で、食事の時間も短くて 1 時間ほどでバスに戻り、20 分ほど市内を走って、レマン湖に注ぐアルヴ川を渡ってホテル（ラマダ アンコール）に到着となった。また、ここでドライバーのジャッキーさんとお別れとなった。

8 月 15 日（水） 晴れ

ドライバーがマルコさんになり、9 時半にホテルを出発した。バスは高速道路を軽快に走り、その間、TD さんからジュネーブについての説明（昨日の続き）があった。市内には 200 を越える国際関連の建物があるとか、フランス革命が原因で、宝飾技師から、器用な手先を生かして時計職人に転職した人が多いので、この街が時計で有名になったとか、それゆえパリからジュネーブに来た人が多いとか続いた。

バスはレマン湖に沿ってローザンヌ方向に進んだ。ローザンヌはホテル・観光業が盛んで、この街にあるホテル学校には、各方面から勉強に来る人も多いとか。また、バレエコンクールが行なわれるのでバレエ学校や、かつてはダイアナ妃も修業に来たという花嫁学校もあるそうだ。また何といてもかの IOC（国際オリンピック委員会）の本部も置かれていることで有名である。

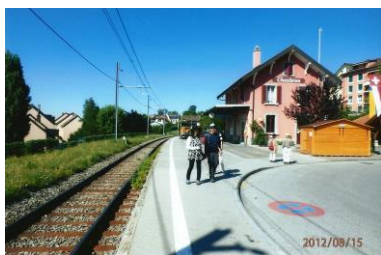
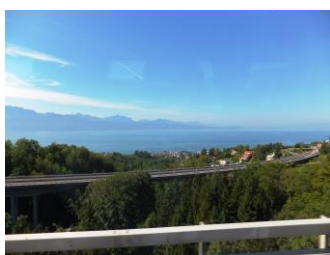
ジュネーブと言えば…『ノストラダムスの大予言』（五島 勉）の第 1 巻が出たのは確か昭和 48 年、僕が高 1 のときであった。1999 年の 7 の月に人類が破滅するという不気味な予言に、身の毛もよだつ恐ろしさを抱いたのを鮮明に覚えている。ちょうど、その少し前に読んだ、北杜夫の『ドクトルマンボウ航海記』の中に「ノストラダムスの予言は結構あたっている！」と書かれてあったことから、より強く印象に残っていた名前だったのだ。そのなかに

“逃げよ逃げよ、すべてのジュネーブから逃げ出せ
黄金のサチュルヌは鉄に変わるだろう
巨大な光の反対のものがすべてを絶滅する
その前に大いなる天は前兆をしめすだろうが”

という四行詩があって、そのジュネーブにいるんだ…早く逃げなければ！等と

いう勝手なことを思い浮かべて、思い出し笑いをしてしまった。

ローザンヌを少し過ぎた辺り、10 時 40 分にローカル鉄道のシェーブル駅前でバスを降り、レマン湖を見ながらの“ゆっくりハイキング”がスタートした。とても爽やか！と言いたところだが、ちょっと暑くて汗ばんでしまうほどであった(^^ゞ。レマン湖の対岸はフランスというが、なんかあ～、ちょっとレマン湖が琵琶湖、そして対岸の山々が比叡山のように感じたのは、僕が粋でない証拠なのかなあ(?_?)。



(レマン湖も美しく輝いて見えた ピンク色した可愛いシェーブル駅)

この辺りはラヴォー地区と呼ばれる良質なワインの産地であり、広大なブドウ畑が広がっている。とってものどかで素晴らしい光景である。ブドウ畑には時々バラが植えられていたが、これは虫が付いたかどうかをみるため、バラには虫が付しやすいから、早めに駆除するための方策ということであった。



(駅前でバスを降り、レマン湖の見えるブドウ畑をゆっくりと散策した)

ここで一句、『レマン湖の 水藍色に 夏盛り』



(ブドウ畑にバラが咲いた♪～ 女性陣は日焼け対策もバッチリ！ たわわに実るブドウ)

ブドウが生っている様子を実際に見ることができ、ブドウ畑の雰囲気を感じながらの散策はとても楽しく軽快であった。スイスのブドウはシャスラー種が多くスイス全体の生産量の 60%を占め、フルーティーで切れ味のよい辛口ワ

インに仕上がるという。湖畔にはヨットハーバーも見られたが、スイスは海無国なのにヨット競技の強豪国なのだそう。また、史上最強のテニスプレーヤーと言われているフェデラーも輩出している。アルペンスポーツだけでなく、なかなか優雅な国なんだなあ。



(湖畔には日光浴をする人も)

1 時間半、7 km 近く歩いて、サン・サフォランで待っていたバスで 12 時に再出発した。ローザンヌからモントルーにかけて、レマン湖を見下ろす高台にはブドウ畑が延々と続いていた。その中心にあるヴヴェイの町は人口 16000 人、ワインの集散地として栄えたところである。ここはジュネーブから列車で 1 時間たらずというロケーションであり、富豪の邸宅が多い所でも知られ、かつてはオードリー・ヘップバーンやチャップリンも住んでいたという。

また、ヴヴェイにはネスレ（昔のネスル）の本社があるが、世界に先駆けて板チョコを製造したとのこと。洒落た近代建築の本社ビルの他、ネスレの看板をいくつか見ることができた。



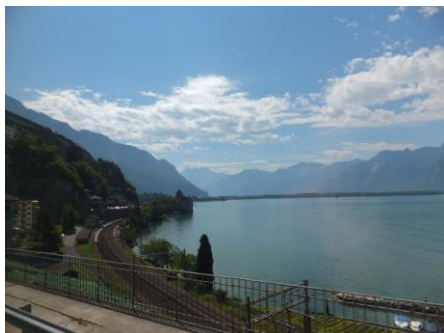
(ネスレ本社ビル さすがに立派！ この地区で最高級のモントレールパレス)

モントレールの湖岸で 10 分ほど休憩してフォトタイムとなった。陽光にキラメク湖水が眩しかった。



(対岸の山は、琵琶湖越しに見る比叡山のような感じ 湖畔の散策路 マーキュリー像)

モントルーの海岸には、クィーンのボーカル、フレディー・マーキュリーの銅像があるというので行ってみたかったが…。バスの停車したところからちょっと離れていたなので実際には近くに行けず、バスからのショットになった。1978年に、この地でレコーディングして以来、ここをセカンドホームタウンにしていたということで、右手を振り上げたノリノリの銅像が作られたそう。バスでほんのちょっと走ったところに建てられていたので、走っていってみるべきだったなあ(?_?)



(湖畔を進むとシヨン城が見えてきた

お昼は白ワインとチーズフォンデュ)

12 時 40 分過ぎから、チーズフォンデュの昼食となった。元々は古くて味の落ちたチーズを白ワインで煮込んだ家庭料理であり、こちらではパンのみをチーズにディップし、日本のように温野菜やソーセージを用いることはないそうだ。グリュイエールチーズを白ワインで延ばしていく…ということで、合うのは当然白ワイン。“チーズフォンデュに合う白ワインを！”をいって注文して、しっかりと飲み干しましたよ。Taste good！

ちょっと酔っぱらった足取りで道路を渡ってシヨン城への入場となった。今回のツアーで、はじめて史跡らしいところへ足を踏み入れた。この城はローマ時代から、湖に突き出た岩場を利用して建造され、9 世紀には城のようなものが形造られたという。そしてイタリアからアルプスを越えてやってきた商人たちに通関税・物品税をかけるための関所として使用されていたそう。



(レマン湖の畔、線路越しに佇むシヨン城、25m の高さを誇る天守閣)

通商の他、巡礼の道として栄え、12 世紀には所有者が次々と代わり、最終的にはレマン湖を支配していたサヴォワ家のものとなったそう。レマン湖の女

王と讃えられるシヨン城には、16 世紀に詩人バイロンが訪れ、監獄として使われた部屋にサインをしたことで世界的に有名になったという。

初めに高さ 25m の天守閣を見てから城内へ入った。入口にはシヨン城のミニチュア模型が置かれていた。そしてまずは食堂の間に入った。600 年前に造られた天井と、800 年前に建てられた柱が、広い空間を支えていた。暖炉の上にはサヴォア家の紋章が掲げられていた。白十字の周りは悪から守るための模様なのだそう。



(シヨン城の模型と広い食堂の間 由緒ありそうな暖炉の上にはサヴォア家の紋章が)

2 階に上がると、まずは船底式の広々とした天井に目が行った。20 世紀初頭の改修の際に出てきたものの一部の破片から再現された物や長もちなどが展示されていた。



(思わず高い天井に見とれてしまった 装飾品と 3 階のベッド)

3 階に上がると、隠し廊下や代官の寝室、洗面所等もあり、壁画も洒落ていた。



(ベッドの脇には椅子が置かれていた ちょっと疲れた TD さん 洗面台)



(騎士の間には 50 人の代官の顔が描かれていた



領主の寝室)



(トイレは 13m 下のレマン湖に直接排泄されるという 礼拝堂の天井は旧約聖書の絵)
礼拝堂は一時期火薬庫となり、19 世紀になって再び礼拝堂として使用されたという。



(第 4 の中庭からは 3 つの塔が見える 鎖帷子、鎧と槍 大砲の展示も)

左の鎖帷子は 8 ㌔、鎧は 30 ㌔もあるという。後ろに立てかけられた槍は 15 世紀のものだという。



(武器や食糧の貯蔵庫

幽閉って柱に鎖でつながれていたんだあ(>_<))

武器や食糧の貯蔵されているところを抜けていくと、いよいよこの城を有名にした牢獄を見ることになる。ジュネーブの宗教改革者であったボニヴァールが 16 世紀ここに幽閉され、それから数百年たってシヨン城を訪れた詩人のバイ

ロンが「シヨン城の囚人」という詩で彼を詠ったということである。破天荒な生活をして 30 代半ばで夭折したバイロンが、このような所にサインを残しているのは、ちょっと奇異な感じがした。



(入口から 3 番目の柱にバイロンのサインが！ レマン湖を眺め毎日なにを思ったのか？)

囚人をつないだ鎖掛けやバイロンのサイン等を見たが、美しいレマン湖を鉄格子越しに毎日眺めながら、幽閉された 4 年もの間ボニヴァールは何を思って過ごしたのだろうか？

シヨン城の売店で、本場ネスレのアイスクリームを買い食いしてからバスに乗り込み、15 時過ぎの出発となった。一路、チューリッヒへと向かった。



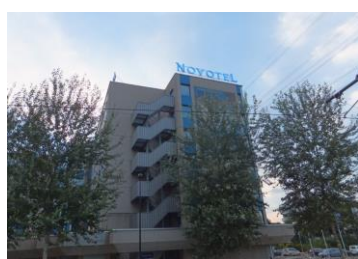
40 分ほどすると、グリュイエール湖を眺めることができたが、遥かに山々を望みながらスイスらしい丘陵地帯を進んでいった。16 時を過ぎると首都ベルンの近郊を走ったが、右手奥の彼方にはアイガーやメンヒなどを見ることができた。ツェーリンゲン公が、この地域で最初に仕留めた動物（熊）から街の名前がベルンになったとのことで、今でも熊はベルンのシンボルとして、広く市民に愛されているそうだ。U 字型に蛇行するアーレ川が、この街のお濠代わりになったという。



スイス第 1 の都市であるチューリッヒは、チューリッヒ湖の北西端に面し、

金融、器械、線維などによって支えられ、人口は 36 万人であるという。へエー、36 万人で第 1 の街なんだあ。しかしチューリッヒ都市圏には 200 万人近くが居住しており、一極に集中しないスイス人らしい配慮（独自性？B 型的な感じ？）が窺われる。TD さんからは、14 世紀から商人が力を持ってきてチューリッヒは商業の街になり、学生も多いというような説明が続いた。確かに、1833 年創立の名門チューリッヒ大学や 1855 年創設の連邦工科大学など、文教都市としての一面も持っている街である、

18 時にホテル（チューリッヒ・ノボテルエアポート）に到着し、19 時よりバンケットルームで最後の夕食となった。チューリッヒに来たからには街なかに出て一杯やってみたい！と思い、夕食後すぐ、H 井さん、Y 川さん、N 口さん、M 田さんと連れだって、路面電車トラムに乗ってチューリッヒ市街に繰り出した。石畳をガタゴトと音をたてて進む懐かしい揺れが心地よかった。

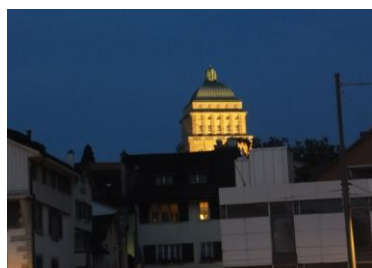


（ノボテルエアポート

リンドバーク広場の駅

路面電車の中で）

チューリッヒ市街は人口 36 万の割にとっても賑やかで、やはり周囲に 200 万人が居住しているスイス第 1 の都市、チューリッヒ州の州都であることを感じさせてくれた。口腔外科の顎変形症の手術（Obwegesser - Dal-Pont 法）で有名なチューリッヒ大学が美しくライトアップされているのがとても印象的であった。また、若い女性も垢ぬけていて、中には 12 等身とも思えるような美女にも遭遇することができた（写真が撮れなくて残念！）



（チューリッヒ大学 ビアホール・ウルフ 店内ではライブをやっていたのだが…）

COOP で買い物をし（これは主に、H 井さんがお土産のチョコレートを購入した）、賑やかな街を散策してから、さて、どこで飲もうか？ということで、僕が道行く女性（それも美女ばかり）に声をかけて、どこかいい店を教えてくださいと尋ねたところ、どこかのおばさんが（若い女性に声をかけたのだが、答

えてくれたのは連れのおばさん、いやお姉さんだったのだ) “Wolf something…”
って教えてくださった。おっ、日本でもおばさんは“〇〇なんちゃら”とかい
うけれど、スイスでも同じで“Wlof なんちゃら”ってきちやうんだあ〜と思
わず可笑しくて笑ってしまった。

ということで、「ビアホール・ウルフ」という、ライブ・バーで飲むことにな
った。リマト川からの爽やかな風に吹かれ、また、川沿いのプラタナスの木が
一層の風情を醸し出してくれた。思わず“プラタナスの枯れ葉舞う、冬の道で
〜♪〜”とシューベルトの『風』をH井さんと歌ってしまった。彼は、レマン
湖の風景がアラン・ドロンの主演の映画『太陽がいっぱい』を彷彿させてくれる
と、なかなかシブイ話をしてくださった。

店内では男女3人組のライブをやっていたが、あまり客がいなくて、ちょっ
と寂しかったが、われわれはテラスに陣取ってビールとワインと旅行の話で盛
り上がった。



(スイスは最高、乾杯〜！ トム・ハンクス似のトムとのショット)
担当のウェイターがトム・ハンクスに似ていたので、僕が“Hey, Tom!”と呼
び付けると、彼の名前が本当にトムということで、さらに盛り上がってしまっ
た。

23 時少し前にホテルに戻ったが、海外での貴重な自由時間—それも大事な最
終日の夜—を愉快的方々と堪能できて、充足感いっぱい旅のフィナーレを迎
えることになった。

8 月 16 日 (木) 雨

いよいよ帰国の日となったが、最後に雨。今日は観光もなく帰るだけなので、
非常にツイテる旅行であることを感じさせてくれる雨であった。アルプスとか
レマン湖とかで天気が悪かったら、折角の絶景も台無しだったもの…。

デニスさん運転のバスで 10 時過ぎにホテルを出発すると、雨は上がって来て
いた。

スイス航空 160 便は 13 時にオンタイムで出発した。機内では阿部寛主演の『テ

ルマエ・ロマエ』を見たりして寛いた。11 時間 35 分、再び 9600 ㌦のフライトの後に、

8 月 17 日（金）の朝、成田に到着。日本は超暑い～(^^ゞ

いや～あ、いい旅行だった。スイスは絶対にお勧め。また行きたい～！！

あとがき

はじめに領土問題について触れたが、昨今は、どこに行っても中国人・韓国人観光客が多くて、彼らのマナーの悪さには辟易とさせられてしまう。以前行ったループルでは、ストロボ禁止の絵画撮影もお構いなし（絵画が傷んじゃう～）、アンコールワットでは韓国人ガイドが傘で壁画を指しながらの説明（信じられないことに、時々壁画を叩いている！！傷ついちゃうよ～(>_<))、どこでも大声でわめき散らし周りの観光客のことを考えない協調性のなさ…。今回もユングフラウヨッホの展望室内で、即席のキムチラーメンを食べている輩がいて、室内がキムチ臭くて参ったあ～(>_<)そのような光景を見るにつけ、日本人でよかったと、つくづく感じる。

素敵なメンバーと優秀な TD さんのおかげで、今回のスイス旅行は想像以上に素晴らしいものとなった。旅の目的は“出会い”であり“癒し”であることを以前から述べてきているが、今回は絶景とも言える数々の風景との出会いがあり、その出会いが心の癒しにつながった。本当にスイスはよかった！

いつもなら帰国後 2～3 週間で書き上げる恒例の旅行記だが、種々の雑用に追われ、たっぷり 2 ヶ月を要してしまった。気が付くと、すっかり秋めいてしまっている。自分でも読めないような汚い字のメモと(..)φ、薄れ行く記憶との戦いとなった。若い頃はバツグンの記憶力を誇っていたが、加齢によって衰えるばかり…(-_-;)

まあ、それでも何とか書きあげることができ、自分で自分を誉めてあげよう！史跡や遺産巡りの旅と違って、スイスは自然美、その眺望が素晴らしく、文章なんていらぬ場面が多い。言葉では語り尽くせないことばかりである。一度は行かなければならない所だと以前から感じていたが、本当に行ってよかった。そして、この旅行記を書いていて、是非ともまた行ってみたいと痛感している自分に気が付いた。

ちょうど『世界の果てまでイッテ Q』で、イモトのmatterホルン挑戦プロジェクトが放映された（9 月 30 日 OA）。われわれの帰国（8 月 17 日）のすぐ後にスイスに入り、20 日過ぎから現地でのトレーニング、トライアル登山をこなして、見事にmatterホルン登頂に成功したのである。彼女の体力と気力にはただただ脱帽するばかりだが、それを観て、さらにスイスの素晴らしさを追

体験することができたことが、“また行きたい！”っていう想いを駆り立てているのかもしれない。

今回お世話になった皆さん、どうもありがとうございました m()m

これからも、いい旅行をしたいですね!(^^)!